

岐阜県土岐市大富西山1号古墳出土の青銅製鉢

The bronze bowl excavated from Ohtomi Nishiyama No. 1 Kofun tomb
in Toki, Gifu Prefecture.

高橋健太郎 (Kentaro Takahashi)¹⁾

1) 名古屋大学大学院人間情報学研究科
Graduate School of Human Informatics

Abstract

This article is a report on the Dohwan excavated from Kofun tomb in Toki, Gifu prefecture. This Dohwan is the first example as excavated remains in Gifu pref. and is regarded as a product of the first half of the 7th century A.D.

はじめに

青銅製の鉢「銅鉢(どうわん)」とは、鑄造・鍛造で製作された仏具・食膳具としての容器を指す。わが国では紀元6世紀末頃より古墳・寺院址での出土遺物や法隆寺献納宝物・正倉院献納御物などの伝世品でも確認される。銅鉢の起源はもともと大陸にあり、中国・韓半島でも出土している。中国では新・後漢代、韓半島でも中国と同様の鉢が楽浪郡の後漢墓で確認される。わが国と系譜がたどられる銅鉢は紀元6世紀末～7世紀より隋墓・初唐墓での事例が挙げられる(毛利光1978)。銅鉢のわが国における初源は6世紀代、安定して確認されるのは古墳時代後期であり、終焉は少なくとも11世紀以降のようである(原1996)。

古墳出土資料は日本国内で100例を超える(毛利光1991)。その意義に関しては、地方豪族の間で大陸的食膳具の受容や仏教文化の受容がなされたと考えられている。国内における銅鉢に関する研究初期より畿内に出土例が少ない事が注意され(小田1975)、その後の研究の蓄積から、北九州・関東地方(毛利光1978)、中部高地(原1996)に分布が多い事が指摘されている。その由来に関して畿内では、文献史料から寺院での所蔵記録があり、正倉院献納宝物など伝世資料中心であるのに対し、地方の例は古墳出土事例が中心である(毛利光1978)。今回紹介を行う土岐市大富西山1号古墳例は、単に岐阜県初の出土事例というだけでなく、比較的畿内に近い地方での有力者層が、古代寺院波及^(註1)の以前に、仏具にも用いられる大陸的食膳具を入手し古墳に埋葬している点が注目される。この状況は明らかに東国での出土状況と類似し、畿内と東国を結ぶ古代東山道が近隣に存在する事とも関連すると推測され、今後、同様な資料が出土する可能性が指摘される。

銅鉢の編年

毛利光は銅鉢を以下のように3分類した(毛利光1978)(毛利光1991)。

銅鉢はまず、その底部形態により「無台鉢」「高台付鉢」「高脚付鉢」に分けられる。本稿で取上げる事例は「無台鉢」である。「無台鉢」はさらに体部の形態を加え、A(丸底)系列-A I(体部が張り深い)、A II(体部がゆるやかで浅い)、A III(I類に類似するが口縁が外反する)A IV(I類に似るが

体部が深く口縁が内湾する)とB(平底)系列-B I(体部が張り深い)、B II(体部がゆるやかで浅い)、B III(体部の立ち上がり直線的)に細分される。また、沈線による施文状況により、A類はa(沈線を器面の各部位に施す)・b(沈線を口縁にのみ施す)・c(無文)、B類はa類(沈線による施文が行われる)とそれ以外に分けられる。A/B系列ともに6世紀末から一部は平安時代まで継続する。最も年代観を反映する施文要素に注目し、編年を概観すると以下ようになる。8世紀以前と以降で様相が異なり、A/B系列とも沈線装飾を口縁部以外にも施文するもの(A I aとB I aの一部)は7世紀代に位置づけられ、7世紀中葉以降より沈線施文が口縁部のみもの(A I bとB I aの一部)が増加し文様の素文化が進行する。8世紀以降には、口縁部のみ沈線を施文するものと沈線施文がなく無文のもの(A I cとB II)へ移行するようである。

岐阜県土岐市大富西山1号古墳出土例について

土岐市は岐阜県東南部の東濃地域に属し、市域南部は愛知県尾張・三河地域に接する。南部は古成層・火成岩、北部は第三紀の丘陵地域となる。大富地区は市北部を流れる土岐川右岸に位置し、沖積地を見下ろす丘陵・段丘上に古墳が築かれる。乙塚古墳(国指定史跡)・段尻巻古墳(国指定史跡)のほか、大富地区が属する泉町内だけでも過去の分布調査では42基の古墳が知られている(土岐市史編纂委員会1971)。そのほとんどが未調査または滅失しており、詳細は不明であるが、横穴式石室を有する古墳時代後期(紀元6世紀後半～7世紀前半)に属する古墳がその中心であると推定される。

大富西山1号古墳は、標高240m程度の丘陵上に立地し(図1)、その周辺には推定8基の古墳が半径200mの範囲に群在する。墳丘は10m以下の小規模なもので石室は既に開口している。埋葬施設は両袖式で、玄室の平面形は胴張りにならない長方形である(註2)。過去に石室内で銅鏡と共に、鉄釘・鉄鏃が採集されている。編年作業の進んでいる須恵器・土師器などは採集されておらず、現在に至るまで細かい年代観に関しては指摘されていない。

実見に際し、エチルアルコールを塗布しながら表面の泥を竹串・筆で除去し清掃を行った。口縁・底部は完存し、胴部は1/3ほどが残存する。表面は緑錆で覆われているが、残存状況は良好である。口縁はやや直立気味に立ち上がり、内面がやや肥厚する。胴部はボウル状に膨らみ底部へいたる。底部は平底である。法量は口径16.3cm/底径8.3cm/器高6.6cmで、器壁厚は1mm程度と極めて薄く、口縁内面肥厚部を除きほぼ均一である。口縁・胴部に4本(2本一組)の沈線が2ヶ所、底部外面に3本の沈線が1ヶ所、口縁内面肥厚部下に2本の沈線が確認される。詳細な製作・施文手法の痕跡は確認できないが、おそらく鑄造後、銅鏡をロクロ上に固定し、沈線を回転施文したと推定される(図2・写真1・2)。

分類・年代観について先述した(毛利光1978)に即して述べる。本資料は無台鏡B I a類に属し、紀元6世紀末～7世紀前半に比定される。広島県竹原市横大道8号古墳出土例(図3-1)(毛利光1978より転載)とは器形・法量・文様構成/施文部位が類似する。底部施文に注目すれば長野県松本市南栗遺跡の竪穴住居跡6号出土例(図2)(原1996より転載)が類似する。

ま と め

本稿では、大富西山1号古墳出土銅鏡が7世紀前半に属することを指摘し、東濃における寺院波及前の段階で、仏教的・大陸的な金属器の祭器・食膳具が波及していることを指摘し得た。年代論に終始したが、製作技法・生産体制と流通に関してはまだ多くの議論の余地があると考えられる。

本稿を執筆するにあたり、荒川孝志(土岐市文化財審議委員)・中畷 茂(財団法人土岐市埋蔵文化

財センター)・林 順一(土岐市文化振興課)・藤井康隆(名古屋市見晴台考古資料館)(五十音順)の諸氏にご教示頂いた。感謝いたします。

〈付記〉

本資料は実測図・写真とともに現在、土岐市美濃陶磁歴史館に収蔵されている。

〈註〉

1. 岐阜県恵那市正家廃寺遺跡が塔礎の構造・出土須恵器から奈良時代に属し、東濃における古代寺院波及の最古例と言える(三宅・島田ほか2000)。
2. 中畠 茂氏(土岐市埋蔵文化財センター)にご教示頂いた。

〈引用・参考文献〉

- 小田富士雄(1975)「日本の古墳出土銅鏡について－武寧王陵副葬遺物によせて－」百済研究6、忠南大学校百済研究所、1-22頁
- 田中静男(1971)「5. 古墳 三. 土岐市の古墳(1) 泉町の古墳」『土岐市史1』土岐市史編纂委員会編 土岐市、35頁
- 原 明芳(1996)「銅鏡考－長野県の奈良・平安時代を中心として－」『長野県の考古学(助長野県埋蔵文化財センター研究論集)』(助長野県埋蔵文化財センター、241-259頁
- 三宅唯美・島田敏男(2000)「6章 考察 創建と廃絶の年代」『恵那市文化財調査報告書38 正家廃寺Ⅱ・寺平遺跡』恵那市教育委員会、116頁
- 毛利光俊彦(1978)「古墳出土銅鏡の系譜」考古学雑誌64-1、日本考古学会、1-27頁
- 毛利光俊彦(1991)「10. 青銅製容器・ガラス容器」『古墳時代の研究8』雄山閣、189-198頁

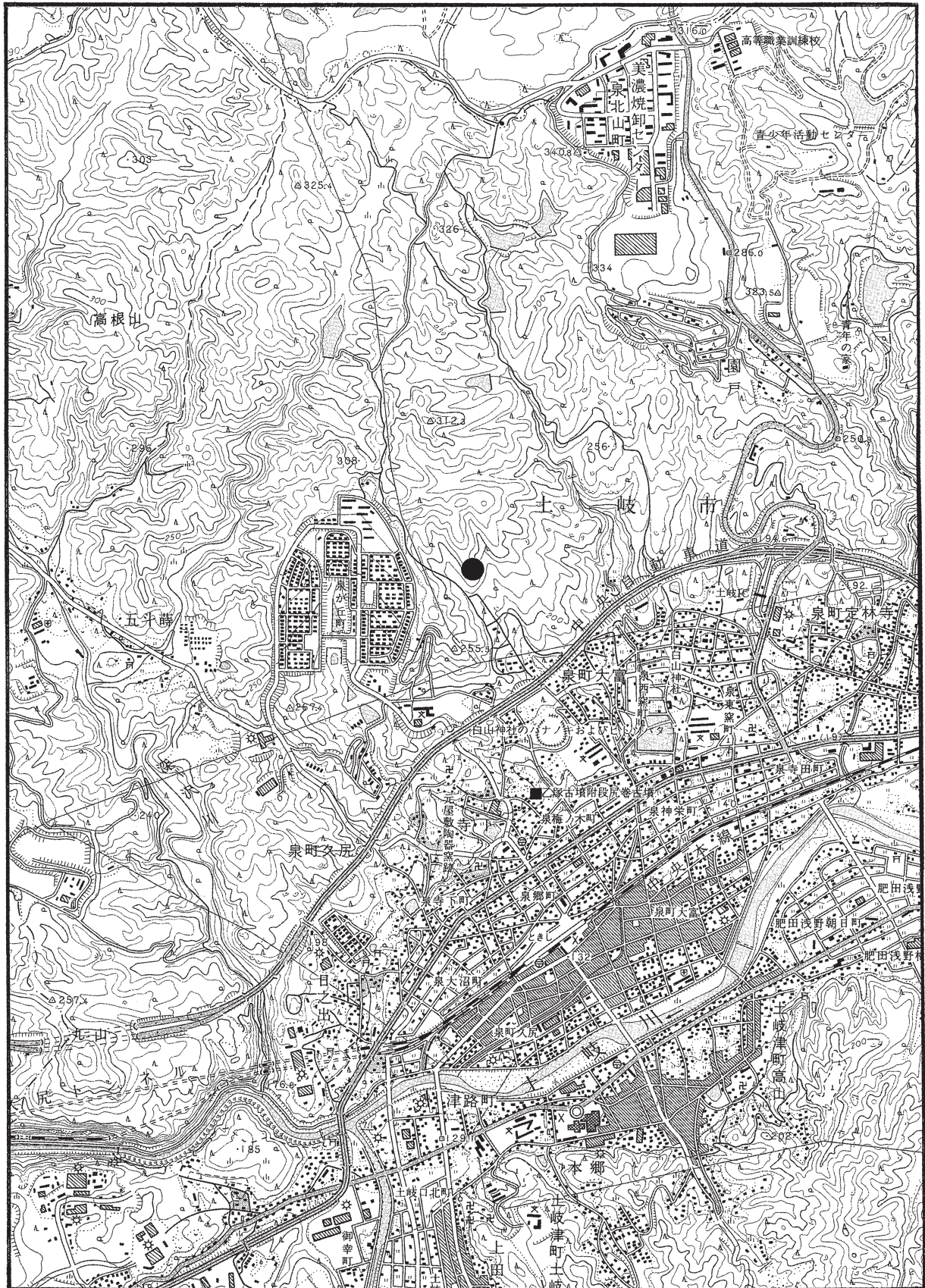


図1 大富西山1号古墳所在地(国土地理院発行2万5千分の1地形図「土岐」に加筆)

● 大富西山1号古墳 ■: 段尻巻・乙塚古墳

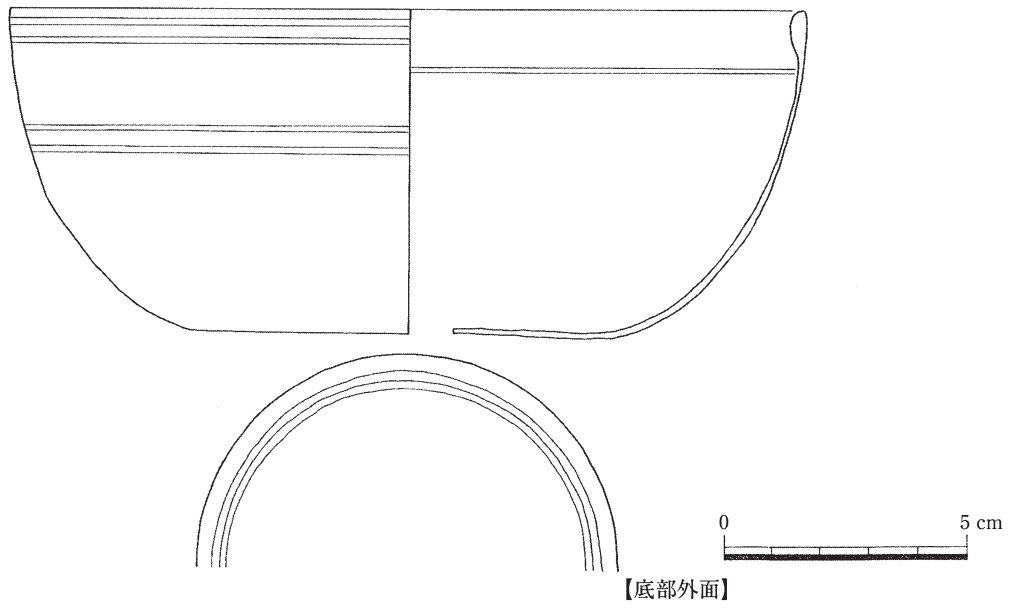


図2 大富西山1号古墳出土銅鉢（スケール2：3）

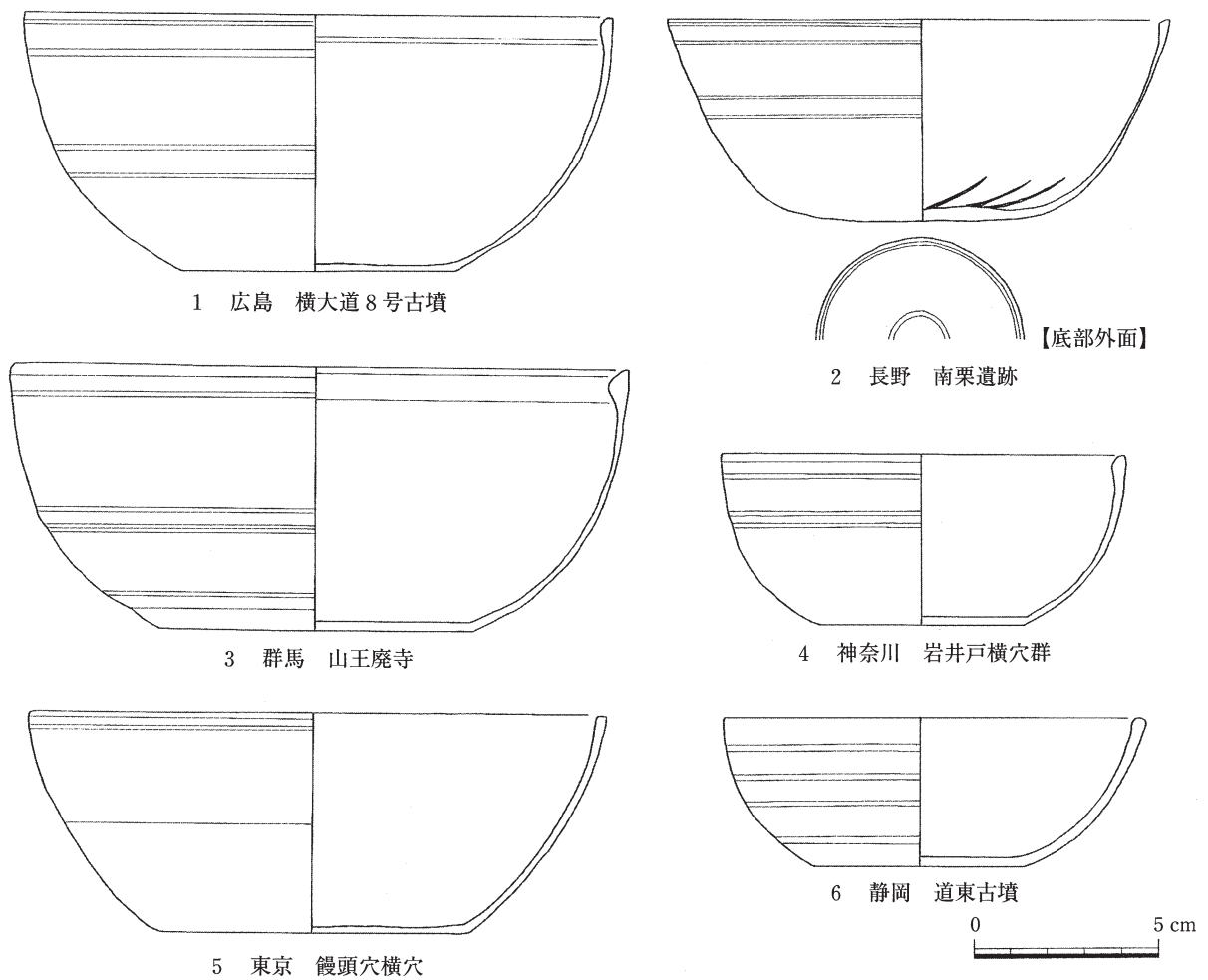


図3 各地の無台鉢B I a類（毛利光1978・原1996より再トレース・一部修正）（スケール1：2）

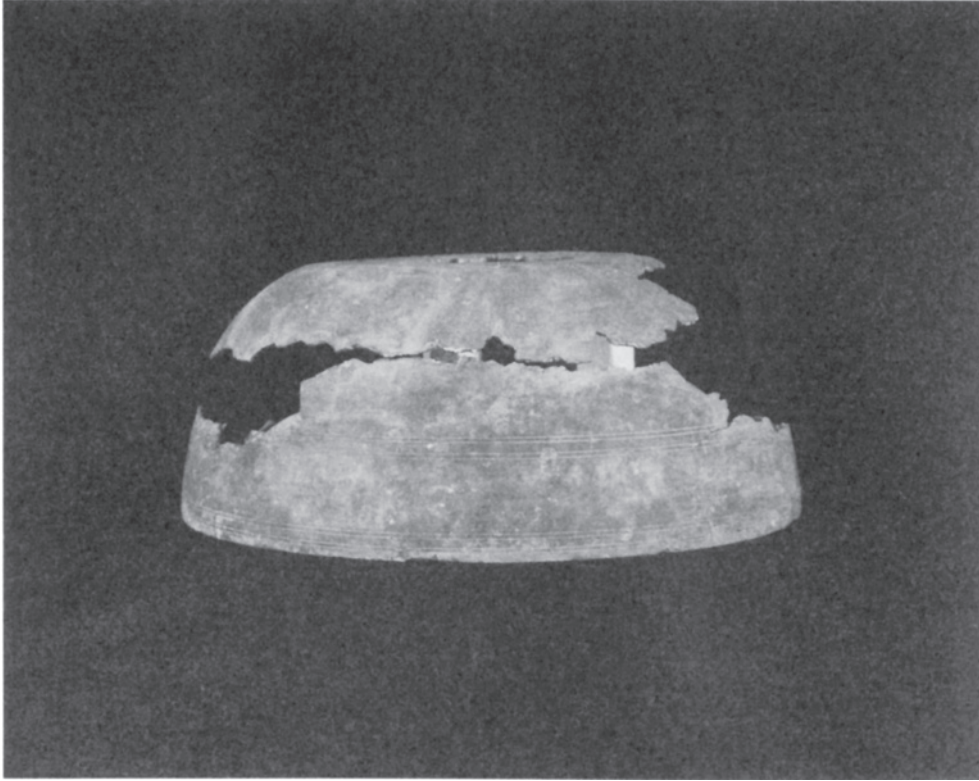


写真1 大富西山1号古墳出土銅鏡（正面・天地逆で撮影）

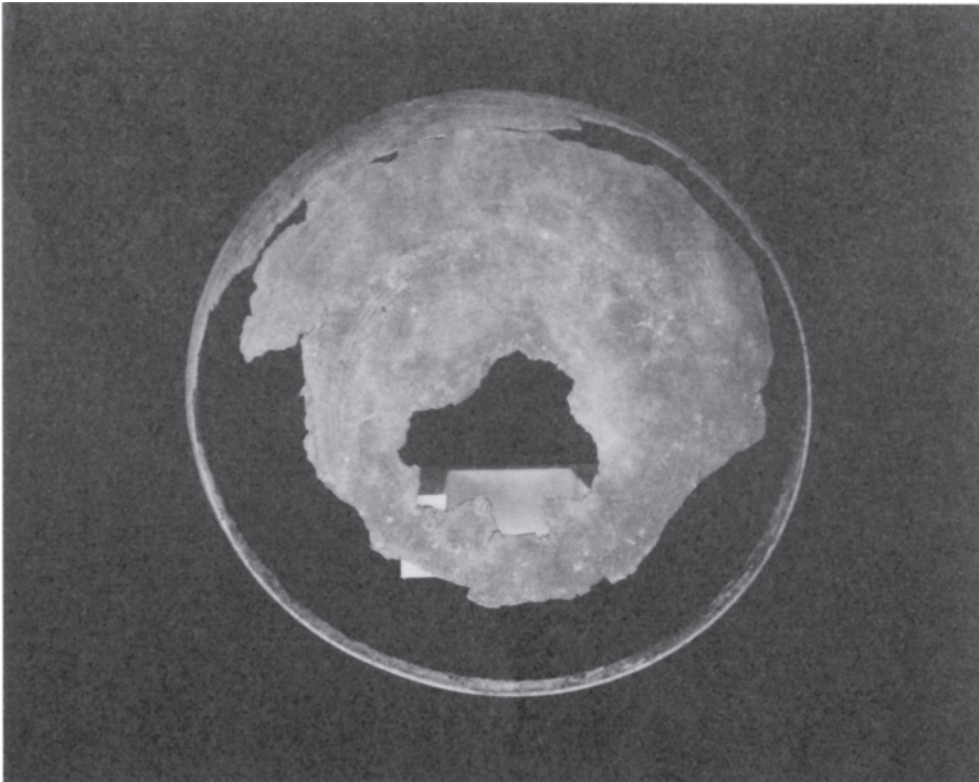


写真2 同上（底部外面）